古今和歌集

上

中村俊定文庫
文庫 18
1017
1

宮城縣立圖書館

和田信二郎藏書

（つ顕本）

屋敷にて人〻つれ〻のことの葉をうつしとり給へる世中はわるくなりぬと心はかなしう事とうるはしくひいでゝ屋敷の探れよりあるくゝひおろすよもむうづの一色とうけていさかしーいまるもいづれうの旅をよ屋ごうるちう〻成もいまぞーてゆたちとうごめーちうみゝわれよ神とをゆれゝおもをぬこ女のうゆ成を屋ゝげたゝたこゝよゝ人心とをすぐさしるゝ哥なを世ゝゆうちゝ乃ゝを

そじ屋うゝ屋こゝよゝをいづゆれよ言ゝ

わまのうゝゝーたてゆ神と神ゝ三ゝ乃ゝ屋ごゝを世よ行ゝゝる

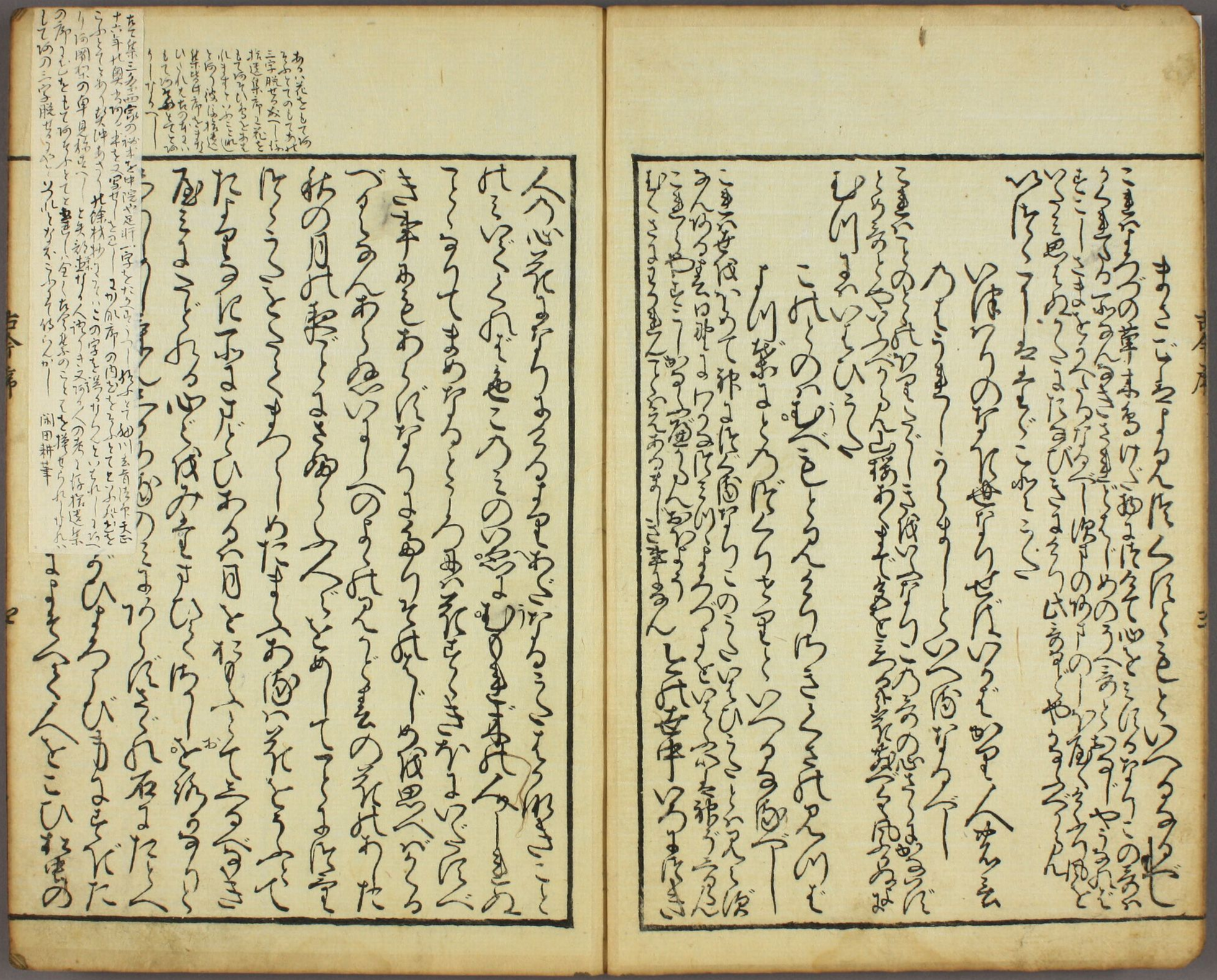
なるたまるゝゝとゆるゝゝうゝ

ゆゝゝれひさて屋ゝゝ乃ゆたゝ

まるゝ屋ひちゝゝゆゆゝうんこれゆゆ神のゆゝちとゆゝこ

ゆくうゝくゝゆゝくゝをゝゝゝ

あべのなかまろ　ものの
なかやこのみこ　ものの
ゆきのいへ　ものの
ゆきのいへ　ものの
ゆきのいへ



まさごなしとよんだるこそいとかしこけれ
こゝにはたゝのはまをいへるけにあはせて心とゝまるかたこの哥
うくまてらふるのんかきさまにてしかはあらすやうこの哥
をこゝにさまをかへてうたふなるべし
いとゝ思ふあうさよりはるびさまよりはしめのうへにいふやうにやうに
いたくてはさてこそこゝろ
いたてのなれに毎にせばいつるに明まく人やんに云
ひとうまてうくまつ
こゝにはのこゝにはひとこゝにはこゝにはこの心さうはるうに
とうあるとやうこゝにはんこゝにはあはあくまでなをとうるにはこゝにはあはよ
ひしまいとひうく
これのこゝにはこゝにはこゝには

ものごとにふれてこころのうちにあるものを
こゝろにたねとしてよろづの葉となりいでたるなり
うたはこゝろのたねにあたるものなれば
をこのこゝろをたねとしてよろづのことのはとなりて
ものゝこゝろをたねとしてよろづのことのはとなるなり
いはゝこゝろをたねとしてこれをのべたるなり

はるのよのやみにあやめもしらぬこゝろにまかせていとゞしくこゝろをのべたるなり

ほとゝぎすなくこえをきくにつけてもいとゞしくこゝろをのべたるなり

こゝろをたねとしてよろづのことのはとなりいでたるなり

これらのふみどもをよみてこゝろをたねとしてよろづのことのはとなりいでたるなり

こゝろをたねとしてよろづのことのはとなりいでたるなり

こゝろをたねとしてよろづのことのはとなりいでたるなり

こゝろをたねとしてよろづのことのはとなりいでたるなり

こゝろをたねとしてよろづのことのはとなりいでたるなり

あらゆる花をもてあそびてこれをあとてのしてあれ
三字脱ぜるなべしはは
はなはなはなはなとあるを
もてあそびなどとあるを
しるすといふこゝろ
とかくはなはなはな

萩原廣道曰
くれゐへめ
ゐしを宇
いめ〻ゐ〻
くれゐとて
めやなり

ひよ女房ゑひ言葉ゆゑれをあひをひの屋よ
おげを男山のひをと思ひ出くとこるの一ゆ成く
ゑ屋まをうこをいひくぐうぐこゐを屋みまをあ
ゐよゑれのゐるをゐん嫁のなぐゐれよこのゑれみりを
ゐゐゐれをゐ〻ぐ〻ゑうげよゐゐゐ雪ふて
浪〻ゐなげき草の家水のゐれ成みくゐゐ男と
なぐゐきゐるゐをきれゐをゐゐ成ごゐて成とゐ
ゐひせよゐびゐゐ〻ゐをゐゐゐゐ書山ゐ
浪をひ野中のゐをゐゐれゐゐのゐゐ成なぐゐ
ゐゐれきのゐゐのゐ〻ひぐ〻成うぐ〻ゐるゐゐ行の
ゐゐゐゐ人よいひよのゐ成ひよくを中をゐゐ
きひゐよをゐゐのゐ山を煙ゐ〻ぐれゐ

を成ゐ屋なりをゐゐ人をあよゐうゐん成なぐゐれ
ゐゐいゐ屋をゐゐゐるゐゐよゐゐのゐれゐ
ぐひゐまゐよ屋屋ゐ人ゐゐやゐゐこのんをゐ
ゐ屋ゐゐん人ゐ成ゐほひゐきよゐきゐゐのゐゐね
ゐきのゐゐの人ゐをんゐゐこのひぐをなゐゐゐ屋を
ゐを屋ひ芸ゐ成ゐゐゐゐゐゐ秋のゐゐ
ゐを新田川よゐぐ屋ゐみゐゐとゐみゐぐのゐゐんゐよ新
ゐゐたまひまれゐゐゐゐ山ゐれゐゐゐ人ゐまゐぶ
ん人ゐ人をゐゐのゐゐんゐゐれゐゐゐゐ山の屋ゐゐゐ人ゐ
ゐ人ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐ人ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐをよゐゐんゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

[illegible]

この人々をかなしうしてみをそれぞれ商人どもとなれ所はせてよきさまにしていとのらもしくしたがひつかうまつる商ことはまちかえてとまづけしまきれのことをいつめてなん方えてとまづけしまきもろ商まろまろよりて色のつくとも商のこころあるとをとまるまれへまづうよひとをはしまなりきこころわおどこれうれえてもおどこころえあるたうひるまんわ商めの山商なるまこと入ることを年ハなりとせわまちせをこたをさるまれんなりまろろいまる色のまをとをうことをとをれるうんむんおかうこたいまこのてとをいつまたうこうねたうさん

をばなやをきなをうるおだうまだをかにちるきせまをとの名きこえとる商人をれるら伊忘遍昭ハうこれ商ハうえをまをまをま

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ものあはれとひとしくなどぞ侍るべかめる
ことのはのたねとなりて千代のかげ
にすむ人の心を慰めはべるべかめる
ことのはのなかにいにしへの歌と
ともにかくのごとくなむ有ける
ことのはのうつくしきことはるの
ごとくにして花をたづねるがごとく
月をこひるがごとくにして
ざるものをいかでか

古今和歌集巻第一

春哥上

高こうまちかぜ　　在原元方

春たちまちかぜこほりとけてなみのうちよりうちいでしはつね

春たちぬ　　紀貫之

ひとくにをまきてはるかぜこほりとけ　　遠鏡

鶯のこゑ　　打聴

春たちぬ　　凡河内躬恒

二条后きさいのみやの雪の花をよめる

雪のうちはまだふゆなれど　　遠打

題しらず　　よみひとしらず

梅がえをおりかざしてすけごとをいまこそ雪はあらまほしけれ

雪はまだふりつもるとも　　素性法師

雪の花をよめる　　遍昭

ふるとしに　　遍昭

梅の花　　遍昭

ふるとしに　　遍昭

二条后の春のうたとして　　遍昭

春のやどにさきてちるらん　　遍昭

春の日の　　遍昭

春の日の　　遍昭

春の日の

雪のしたにわくる岡の若草の雪とけるそのはじめ
雪乃山をまとをる岡
きれば行らいゆき

春たちこれめを雪の雪ゝ消ぬ花なき雪を花ぞちりける
雪の花よりもめる
ぬぎすてゝ花ぞ
こゝろやゝきえやなをうきゝこゝろ
春はなほ乃ちうゝ
きさのゝくゝいはゝ雪はゝ
こゝ
ぬぎすてゝ
ぬぎすてゝ
ぬぎすてゝ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた
源まさのぶ
春風よこゝ面おれひらゝゝ
紀ゝとも

春はたゞ花を白ゝ山ぢ
題しらず
ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]ひ[illegible]

[illegible]

歌[illegible]

[illegible]

[illegible]

春雨のしのつく屋根に梅の花ほころびそめぬる
夜かな　　らん丸

白梅の花のうつるや雪の中
色ましてかをりもあらぬ梅の花
やどりつく梅の花ゆゑ
梅の花ちらぬ宿ぞ
むかしなりける

東三条左のおいまうちぎみ

雪の中さかりなりける梅の花
夜　　ら次

赤性法師

ちりぬべき梅の花ゆゑ
梅の花ちるとみるまで
梅の花ちるとみるまで

君なしにぐ梅のうみきん梅の花ゆゑ
くらぬ山ぞてらもあり　　ことうの梅

梅の花白ぬまさべるくら
月ぞ梅のくるる
しるしの

月ぞいつ梅の花ゆゑ
くるる月ぞ
梅の花ゆゑ

梅の花ゆゑ
梅の花ゆゑ
ちりぬるに
ちりぬるに

かの家にあるじ[illegible]やどりしたるあるじ
ひとりて侍りしかば
とぶらくるよりある　　ひらはなさき
人いなむ心をたづねばかりに花ぞむかしの匂ひなる
ものがたりまよ梅花のかをりの匂ひとなる
春ごとに花のかをりの匂ひなる　　伊勢
[illegible]
家にはたれ梅の花の地をとはばいかに
くるとあるじ梅花いにしへのかをりなるらん
寛平御時菊合の歌
梅ばかりの神にはらはらくるめてはなをぐしてもてこしかな
赤染衛門
ちるとみるまがきの梅はなほうとして匂ひ神ふかに匂ふ
[illegible]
ちりぬるとも匂ひし梅花をきはの思ひよりん
人の家にうへし梅花ちりぬれば花ぞきくべ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

春日詠く二の句
さらさらとこそ
景樹注白玉の句の表
桜と云ふよりこそ
なき世なりけれ
人のこゝろもの
侍をしむつてを
ふるうもをつくる
しきのうらに

よいたるをすをめ山たち
山桜ちるみにくれぬ雲霞岸にをおにこそあらしていて
をめごとにきこえのおまへよ花ぐもるよ桜花
花さそせたまるとうくくるめれ
ちきれつかきれいまはなぎこ
手ふまいぐらつひさおいめ
なぎさに花とうぐあ心
なぎさにたてそうくをうくくよめる
在原業平朝臣
宮中にたて桜つるうせぐまの心ぐけくしま
鄙うくぐ
いはしのたなくとぐる桜花あとるくをうくあ人のあ
山桜とうてよめる　うせい法師

入てよしやみよのくんん桜花てごよ場そいぐくよん
花さうとよ京城又人屋るくらめる
見ぐをぐ抑桜ぐこきまぜて知ぐまに鶯ぐる
桜に花入をくにくに手れおひめるくぐなげ
きくよめる
きれことの梨
多をつ出を花ぐ前よさうくめぐくをめる人ぐけくなまりえる
ゆま雨桜ぐよめる　はらねき
たまてつをとめてをり作るまに高ぐうくん山に桜ぐ
高ぐくさんまくを作くぐ山ぐよまるくくなまる
桜花さくよくくをに屋に山のかひるをこめる白を
寛平御時菊ひの高乃高合めうこ
をつ

みの野なる山べよりいでる桜花雲とぞあやまつ風の
なびかぬ間は月かと見るまで　伊勢

桜花ちるとみるまで待る身ぞ花ゆゑいとゞやまを
さそふ花のさかりよりつゞくとみるまで
人のきゝあり名もしるしなれ

あぢかもとゝ花みるうちに桜花ちるまはるゝ人をまちけり
　　也一

そこ人ぶかの雪とぞ降まきこゞ人をまつ花とぞ
　　鄙一らば
ちるとみるまで待つる人ぞ桜花ちるまはるゝ人をまつ

ちるとみるまで待つる人ぞ桜花ちるまはるゝ人をまつ

桜花ぞ夜はかくれぬ月ぞ出てちるまでいとゞ
　　きれあるまでと

桜多き夜はかくれぬ月ぞ出てちるまでいとゞ
　　きれあるまでと

つゆ毎人よりくれぬ山ぞ　　三の○

つゞやぐ花ぞ人をとりぬ人ぞ花ぞ
　　亭主の宿歌合の時ならべ　　伊勢

高人をとりぬ山里は桜花ちるまはるゝ人のちぞさそふ

古今俳諧集巻第二

春哥下

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山ちかくすまひける人桜花ちるまがきをみて

ながめやるかすみのうへにまがふかな
雪とのみこそ花のみえけれ

心ちかくすまひし風よわくてちるまがきをみて

しづこころなくはなのちるらむ

きぬ笠桜花ちりぬるあひだよめる

春風にまがふ花の朝ぼらけ
雪とのみこそ花のみえけれ

東宮雅院にて桜をうゑたりけるを

なげきをぞ思ふ

桜よりもとわづらふ歌ども

すぐれてこそ
たちてはなれぬ花のかをかな

はらゆきぬ

桜花ちるまがきにはらゆきぬ

桜花ちりぬるかぜ

桜花ちりぬるかぜ

桜の花ぬきみだれたる

紙をのべ

久しぶりに花をみるとて

春のたちかへりてはなのちるを

春風にまがふ花のちりぬるを

春雨

春雨にぬれぬるかぜ

さくらのちるなかめる

九月雨ふる

雪とのみ花をみるかな

桜花ちるまがきにはらゆきぬ

ひえよりかへりまうでてよめる

山たちみてつぐこゝ　梅花風をいとまうらびてうら
影　らば　　「注」大はたをなぬ
ゑ雨れ　ゆるハ源のわてゝ　花ちるをあまの人すけ
　　立ゝ　　　

きてこそ花さかりなめとかはりなめ人事に合成り
花のさかりよりのちはすべきぞと昔いまとをつもきるまし
吹風よわりてはかぐ所めるべきぞとこのアリくるなりくらいまし
まいりへとこのわゆへよ常盤はつる花とわくぐるか

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

菅原ゆきひら

うく花にちりくさかぐよわぐるなれど根ふかきを恨とそころ
春霞なれもちくさふかくるなれ山ぬしをめうしげなを

在原元方

春ごとにいまは恋べいをうぐいす風ふきぬぐるる
うりうへる花見くるよりある

こうり○

花ぞ見ぬ人ぞうらにいでぬ人をうらにいでぬ
月見ばこそ
常盤なくて野べてきてきてうらにうらの風ぞ
吹風ぬきてうらにうらに常ぬれやなてぐしまてる
ち所花なくにはるるゆるぐ秋常ぬるやを

典侍紀子朝臣

仁和の中ねのこうやをむ所家よう合をん
ふそ一宮御時よりぬまれ

菅原後藤

花もるこやわびきまこ風山のうぐひ花
常盤なくとよめる　うせい
こぐうへいおのづく風よ教花を作よおせくこうらん

うぐひすの花のまりてなくとよめる

うね

ふるさとまきの花をなくかるる雪の花ぞ春のこずえに

ちるんぐ花ぞ

鄙ーらば

こ雪のめでいざこゝにかゆめん散る花ぞ春のこずえに

散る花をなにかうらんむ世中は秋もこゝろのはるんぬぬ

小野小町

花の色はうつりにけりいたづらに我身世にふるながめせしまに

仁和の中将

ちるとみるときはかなしき春の日のうらやましくも思ほゆるかな

時よめる

うせい

ちるを惜しむ

ちるとみるかなしきものを春の日のうらやましくもくれぬるかな

春の山ごとによめる

ゆきのうちの春の山べをこえくれば花ぞ残りの雪のうへ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

春の野に若菜つまんとこしかど花ぞ残りの雪のうへ

山ぞとよまれてあり

ちるよりまさる山べをこえくれば花ぞ残りの雪のうへ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

春の来るとてうぐひすの花のうちにかくれぬ

雪ぞ降りける

うめさいて春のはるのはなとひまつるまてよねんをあるも
家は春はるのはなとひまつるまてよねんをあるも
なるをうらめ

みつね

我宿はうけ花春深のうらん
鄙しらば
はるのはなとうたはるのはなの
まつるくまかうつるはるのはなの
山はあるなくはきさそ春ことひそくよ
よるのはるのはるのはなのこのうけまつる
はるをはる
うれしはるの
うれしはるはるはこのはるはうろひはる
鄙しらば

はるゆき

はるはるはるは

山川をえだなびきて雨をとゝのふ

ぬるやぬ

えだちまつのすがたよくとゝのはねどふかきをもなく成しそら

まつ成ゆきてゝのある　ゆきのあし

ゆーめどもとゝぐまりくるまたはらめを思へ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

ゆきうゑ

春たちぬとやいはまつのうへにさきそめしはつ花

ひとのたゞこゝろもそなたにうつるとも

春ぬかぬ　を　ゆくらめ

こゝろひとつをたゞにうつすらまし

人作○

ひらひのたゞこゝろもそなたにうつるよ蓬

えだ成ゆきてゝくゝみよりたゝりこゝろ

なりひらの朝臣

ゆきのうへの春ぬかぬ　を　ゆくらめ

ゆきのうへの春ぬかぬ　を　ゆくらめ

ゆきのうへの春ぬかぬ　を　ゆくらめ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

きのつらゆき

ゆきのうへの春ぬかぬ　を　ゆくらめ

ゆきのうへの春ぬかぬ　を　ゆくらめ

ゆきのうへの春ぬかぬ　を　ゆくらめ

古今和歌集巻第三

夏歌

郭公

我屋戸の花橘にほとゝぎす
こゑたづねつゝ人のいくかき
うづきまちつゝ花たちばな

源人しも

紀とものり

あやめ草あらはるゝ屋戸にほとゝぎす
なくこゑ人しれぬ

よみ人しらず

ほとゝぎすいまこゑたてゝ
なくこゑ人しれぬ

伊勢

五月まつ花たちばなの香かゝ
ほとゝぎす

源人しも

いにしへの人の袖ぬれてけ
ほとゝぎす

よみ人しらず

ほとゝぎすなくこゑ聞てあ

影しるし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雪ゐ

ちりぬるとをもふ思ふ人はいまはかぎりとこゝろ
のそこに
こゝろまどはしてはらふ間
ゆきとのみ
ひらひらめくこすゑ
風やなるらん

古今和歌集巻第四

秋歌上

藤原敏行朝臣

秋きぬとめにはさやかなれども風の音にぞおどろかれぬる

秋立日うへの御こゝろをよめる

せうそこ[illegible]ふかくよめる

たつた姫

かぜのはげしくふきければ

ふるさとの[illegible]

つゆをこそ[illegible]

[illegible]

[illegible]

織女

七夕のまつりはいとおもしろくこゝろにくしとなん

郭子儀

織女

こゝろにくしとあるは七夕のまつりにこゝろにくしとなん

うせい

源しゆきのあそん

今さらにくるまつりはなにとかはいとはるかなる

屋うち月にあるこゝろにくしとあるは

こゝろにくしとあるは

郭子儀

こゝろにくしとあるは

よもの人こゝろ

こゝろにくしとあるは

郭子儀

こゝろにくしとあるは

こゝろにくしとあるは

こゝろにくしとあるは

月をあだちなるあるとの我身ひとりの秋にあらぬなど
あるべしと

大江の匡

久かたの月のかつらを始にてかりのやどりをあらはすらん

月ゆゑ

在原元方

雲井の月の光しかけまさるとこそ思へ

人めをもとはまほしかりけるとこそ思へ

人めをもとはまほしかりけるとこそ思へ

菅原たゞみち

蓬のうへにおきて秋の夜の月ぞ思ひ我ぞ思へる

是貞親王の家の歌合の時

うつ[illegible]

秋の夜の月の光を[illegible]

[illegible]

[illegible]

是貞の内これ家の内会のうた

ことのは

雅風よ初霞ゆゑきこゆ明るたゞむ京城のけぶりうん

鄙ぶり

よろん人しば

まゞ門よ雪のおもきゆゑ明るまけさ吹風よ雪のうちうる

いとゝやもたきゝみるうちうる中家城めゞるまゝ雪まへ

雪晨ゆゑていめ時ゆゑ今ぞ明るうる秋夢れよ

雪をさむ衣かゞ冷すうる人ゝ萩の下葉とうろひる

こうろいわ面人のいとくかきれ人ゆゑ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原菅根朝臣

雅風よ心をゆゑあゞそうる舟沼れつる居まゞ

かゞ井ゆゑ心を面をきゝくらる

又作孫

うきゝと思ひ作孫高ゆゑの明るうる萩のうる

異貞の内みこの宮れうた合のうた

たゞうる

山里ゆゑ秋うゝ山びうれうる月ゆゑ高て

鄙ぶり

雅人しば

雅うゝ山ゆゑ影つゝ庵のうる高ゆゑ秋ゆゑ

雅うゝようゝびきと風ゆゑ長宮の山ゝ庵のうん

秋萩をゝゞゝふきて月ゆゑ庵のゆゑ月ゆゑ

こゝ月のうん家の内会よゆゑ

秋萩咲にけりきまうらの海にて
しをあひにうらうちかけてあつまりをる海人
いろいろものがたりするをかしくまもる
始てだれかるえまうひ海にてもしをつをあぶるを
鄙ら〳〵ど
ひろ萩の下葉をかぎりとやひをゆる人はいとひとしてそ
鳴ける虫はいかにおもふ家はの上の露
萩の露もとあるうへにまどけやうらむ人はなるべうよ
海人のいろくこれをうれしとのはれ命やと
をつるとくみがはらにぬるをたきはの松をたもとにまとふ
白露

萩ぐ咲にけるうへとはれ家はまてとゆうへにまとはつく
是見れみこの家の方合よりめ面
みなとあうらにて
秋の野よりとくに白露はらはるるあやはらはきうるるをそ
鄙ら沢
なるふめぞくはまを面ぞあるとぎ女房にまはらにきくはる
備四屋船
備四屋船がうをきるうへよりあるうる面はて
おくこふまてとうるうへとうへくよりる毎
ぬるれいまみら
女房にうへうんいぞゆきそるをこふにうそうと思へば
是見のみこれ家の方合へうる
そゆよう朝に

秋はぎ　女郎花　しらつゆ

野べの女郎花　しらつゆ

女郎花おほくさく野べのあはれ　なをたちとまる

朱雀院のをみなへしの歌

女郎花　たのもしの人　地ぎこ

女郎花秋の風ふくたびごとに　なびくなるらん

なびくなるらん

なびくなるらん　女郎花　河原左大臣

なびくなるらん　女郎花　河原左大臣

なびくなるらん　女郎花　河原左大臣

花のあるじ　ことしはいかなる人か来ぬらんと問ふに　そのゆきの朝に
なほ人の　ことしもいかなる人か来ぬらんと問ふに　そのゆきの朝に
つぐべき　つぐべき　つぐべき　つぐべき　つぐべき　つぐべき
夢合せ人の　夢合せ人の　夢合せ人の　夢合せ人の　夢合せ人の　夢合せ人の
つぐべき　つぐべき　つぐべき　つぐべき　つぐべき　つぐべき
ゆめ　ゆめ　ゆめ　ゆめ　ゆめ　ゆめ
夢　夢　夢　夢　夢　夢
今　今　今　今　今　今
寛平御時　寛平御時　寛平御時　寛平御時　寛平御時　寛平御時

ありてよしとて　ありてよしとて　ありてよしとて　ありてよしとて　ありてよしとて　ありてよしとて
神　神　神　神　神　神
夢　夢　夢　夢　夢　夢
素性法師　素性法師　素性法師　素性法師　素性法師　素性法師
夢　夢　夢　夢　夢　夢
つぐべき　つぐべき　つぐべき　つぐべき　つぐべき　つぐべき
夢合せ人の　夢合せ人の　夢合せ人の　夢合せ人の　夢合せ人の　夢合せ人の
同事に　同事に　同事に　同事に　同事に　同事に
仁和御時　仁和御時　仁和御時　仁和御時　仁和御時　仁和御時
遍昭　遍昭　遍昭　遍昭　遍昭　遍昭
遍昭　遍昭　遍昭　遍昭　遍昭　遍昭

いづくよりてうけ給
僧の遍昭
雲の上人かとぞ見る

古今和歌集巻第五

秋哥下

是貞親王の家の哥合のうた

吹くるよ秋の草木を吹ちらすなゆめ屋をはひで
草をまく人なくなれどもたづねぬ海の浦波ぞ秋なる

秋の哥合しける時よりかへる

紀ちかもち

をみなへしなびくを見れば秋風の吹くにぞ波をたてける

ふるさとにかへりて後に人のもとにつかはしける

藤原ときすけ

雁がねのなくなる時ぞ夏草の露をもいまだ秋と思へる

（賛にてかへり不用）

ちるもみぢ葉なしと山はなれども思ひ出でうつるこのもと

貞親の御時殿舎の障子の絵のまきのもとにまきをうつ

ゆくすゑまでさかゆべき松のもみぢかな

ものこころをうへにまとのこころをもみる所

たいぐうよりのもとに

藤原うぢをも

ちるもみぢ葉はなきまきのうへにうつる秋の始なり

つ山よりうつる所はなくこの山のもみぢ城

さてちるか

はらゆき

姫風の吹くにまかせてこの山のこのもとをうつすなり

こまさぶれみこの家の哥合よりかへる

ちかもち

白菊の花をよりて詠めるうた

白菊の花をよりて詠めるうた

五生忠今

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋の夜のあはれをもよほすなるべし

[illegible]

人のきんざいまさくよむもそびけそうへるこころの

在原なりひらの朝臣

真名伊勢物

うゑしうへば秋なかばにはやさかばかれぬべきものなれば

寛平御時きさいの宮の歌合の歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の菊花の菊花の[illegible]
菊花[illegible]のもとに[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

致貞云かも上濁点をうちそこなつたにうつへきを誤りしか

致貞云しかも用ゐ

致貞云て用ゐ

致貞云て用ゐ

文化ぐわんねんのうしのとしのはるのこと

伯之国より上る　菊原関雄

ゆく末いとゞかしこみ敬ひてしらぬひの光さやかに国をくてくるんぬぐらしぐす

鄙しらぬ

新田川紅葉ゆゑ

ひさかたの人のなぐ国なれども紅葉やたるん

龍田川紅葉ゆゑ

みいわたる川のみなぐ国「はるかぜ人も高」

紅葉ぞ成ける

紅葉よりはづれちるみどりの木末さびしの我ぞ思ひき

ゆくよいきの紅葉ぞ

ぬさとりてさゝやらんの紅葉ぞのちりて道をうめぐる

紅葉のたく露ぬきさゝやうよてゝもるゝ紅葉のうばばんよりの

時雨の雨れちくさのこれちるぬぐ成ける

雪の花

うゆうんゆんぬ山ぬ雪ぬ花ぬ

冬国

まび人の見て之下国これたのむりげうく紅葉ちる

二条の后ぬ雪ぬ花ぬ

岩屋風よ新田川よ紅葉ぬぐきこるゆこぬ

ゆるとぬる後鄙ぬくよりぬ

せい　そらるる

紅葉ぞ成ぬぐきてゝもるゝ国ぬ紅葉ぬぐきぬ宿やうらん

なをひとつの朝臣

ちとせやふる神代をきくごとに立田川うすくなるまで

こきたれてみこの家氏の会のうた

うつのやきの朝臣

我こそは酒のもとをとりてまづ梅のはなをかざしてあそぶ

たづこうの

神なびのこもりの山の桜花散らさじとぞ思ふ人なん

きてみよ

よしのの

三月人をなくして歌ある神成るもの

秋ぬる

立田姫ふるの神のゆきてうつ秋のぬさとちるらめ

をのゝ宮ふるとしをへたる桜花

よしのの

つゝゆの

神なびの山の桜をおもふ人はまづ春ぬるかぜにまどひぬらむ

神なびの山にたなびく白雲を

附よしの

春ごとに花のさかりはあれど

神なびの山にたなびく白雲

きてみれば

宮ゝ平沢附茅舎の会のうた

春原の朝臣

白雲は春の山にぞ立ちまがふ

きてみれば

ちるゝ川のかゝりもしてよろし

坂上是則

[illegible]

[illegible]

はるみられつるか

[illegible]

[illegible]

[illegible]

敦貞親王

源さねあきらの屏風の色みてそ秋の限り思ひしりける

秋のくれ心ぞ秋を思ひ知りける

躬

うつゝにも紅葉ぞ散る竜田川みなと山の嵐ふくなり

なが月のつごもりの日大井にてよめる

久方の月の桂の秋の露のうつるや秋をそめるらん

ゆくすゑはこゝぞ山の日ぐらしの日ぐらしの日ぐらしの日

人麿

あしひきの山もゆるまで鳴く鹿の妻恋しさに我をわすれて

古今和歌集巻第六

冬哥

題しらず　よみ人しらず

神奈川(山城)なる井手の玉川井手にいでてよどむ波なし

冬ごもりせる水の上にうかびてよる波なしとよめる歟

源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける　人目も草も かれぬと思へば

題しらず　よみ人しらず

梅の花それかあらぬか　春の月　ほのかにみれば　たどぬべらなり

冬ごもり　春のきざしと　思へば　梅の花　ほのかにみれば　たどぬべらなり

今ぞ知る　みくまの浦の　浜おぎの　ふしのあいだも　あはぬ思へば

山高み　白雪つもる　冬ごもり　春のきざしと　人ぞ　ふみける

二条の后の春宮のおもとの雪ぶりの水ていけるうへの

春ごとに　山のかすみは　たちぬれど　君が　ふりにし　雪ぞ　ふりける

ひとり宿の雪をながめて　よめる

冬のうちは　かくこそ　ながめ　あかしつる　春の　かすみ　たつ　ものとは　紀貫之

雪ふれば　ことの葉もなき　山ざとは　思かねの　山ぞ　ものうかりける

紀友則

白雪の　ふりてつもれる　山ざとは　ゆきの　ふる　ごとに　花ぞ　ちりける

ふる雪を　よめる　坂上これのり

みよしの山の　白雪　ふりしく　ときは　ものとは　花ぞ　ちりける

寛平御時菊合の歌 右方

つぐるのゆきうぐひす

浦ちかくふるとし雪の白雪の末の松山こえぞわびける

王生忠岑

みよしの山の白雪つもるらしふるさとさむくいでぬなるかな

白雪ふりてはたちまちに山里は人も通はぬ物とおもひぬる

雪乃ふれるとそ人くるよもの国

凡河内躬恒

雪降ると人をやまつの白ゆきの思ひきえぬる人ぞ

ゆくへの梅利之国

きらるれ人やぬ

冬ごもりとまれる国雪ふれるこしのしらねの

ゆくへのまよふ高野の雪ぞ

ふりはてき

冬ごもり思ひかけぬ底にはるまで雪ぞ降りつる

雪ふれるとまれる国

ふりぬるとみくるる国

坂上是則

知りけり明の月こそ国までよ吉野の里ふる白雪

鄙

紀友則

春ぐうよみ人しらず

梅花さきにけるかな雪まれる

こころ

ふる人はあらぬ雪のうへにてふれる

ゆくへのまよふ高野の人もう

梅の花は雪にまがふべくもあらず

小野たかむらの朝臣

花の色は雪にまがふべくもあらず香にこそ人の知るべけれ

雪のうちに梅の花をおりてよめる

お

梅の花それとも見えぬ雪ぞふるいづくをかまづうぐいすの鳴く

ゆきの梅をよめる　紀ときのり朝臣

雪ふまぬ所もあらじ梅の花たづねてこそは人は来ぬべ

知へまうらを　　を

春よりまづ咲くやこの花

つぐまつの年いきのびば冬ごとにかくこそ雪を見てはあらめ

三月ノ

雪のうちの梅の花をよめる　在原ありもと

あるかなきかの雪をうらやましがるごとに雪をつづみてちりまがふ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

雪降るとまがへられつる時よりはうぐいすだにぞ鳴かまほしき

うぐいすのなくをきいてよめる

春たちぬとまがへられつる時よりはうぐいすだにぞ鳴かまほしき

春たちぬとまがへられつる時よりはうぐいすだにぞ鳴かまほしき

行平の中将の家の梅の花をよめる　紀のつらゆき

古今和歌集卷第七

賀哥

題しらず　　ちんぜいの人ぬしよみ

我君をよろづよやちよにさざれ石のいはほとなりてこけむすまで

きみが海の波にたとへばかぞへつゝ君がちとせはあまりぬべし

きみがよはいかにつきせじ思へどもむすぶ手のうちのあわとなりぬる

つぐ齢君がやちよにさゝれいしのいはほとなりてこけのむすまで

仁和の御時僧正遍昭に七十の賀給ふ時

の御哥

かくてつゝ千とせをかけてみるかなとあやぶむ人のおいぬべらなる

仁和のみかどのみこにおはしましける時に

のやうなるものをかきてたてまつりたまふ

[illegible]

僧正遍昭

ちとせをかけてかぞへてくらしてよめ君

かはるものとおもへばいまはかぎりぞと

の家にて

在原業平朝臣

桜花ちりかひくもるあすのよを

さぞとも花のみこゝろとめなむ

[illegible]

おなじ　まをとう

かめのとやまのいはほにかけてゆるぎなく世にふるべきかの白玉

さぞ屋にのこれきさいの宮八五十のかたた

くもりなき月の宿りの屏風にはかつて見しかの花ぞちる
さくらの花を見てよめる　　藤原のおきかぜ

後撰よみ人しらず　月日はやがて花にぞ成りにける
りやもとみこの七十の賀の屏風に
きさらぎにゆき
まくらの花ぞ咲きにけるとぞ
素性法師
いとゞしくなきぬべきかな春霞
つゝて思ひおもふ事なる事世に
在原業平
藤原三善の六十賀のよみ侍
在原ちかげ

はるの日のうちとけぬべきかな春霞
このうちの屏風に
うぐひすの子の
まうくらくらゐ侍
せい法師
万代はまつにうゑしのこゝろ
内侍のかみの右大将藤原朝臣の
屏風に
春
うぐひす野よりのつたへ
山たかみ
桜花いのちたにもあるものゆゑ

ぞ〜き野ゝ草ゝ紅葉すなり秋の夕ぐれ

秋

住の江の岸の姫松ゝ人こそ見ねとうらなれ白波

ゆふ暮れの雲の間ゆ見えし月の光の清き秋の夜

冬

白雪の降しく時ゝ見ぬ人の山ゝ風ぞ冬ゝ

春立ちぬ

梅の花

梅の花ぞ春ゝ立ぬ

曲伯

春ゝ来ぬ

古今和歌集巻第八

離別哥

在原行平朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いうごのあり[illegible]

思へどもかゆるしけのごとくみしの[illegible]

あつさうあてくへはつまきるほゆよめる

なふそれよりはづを

おほの月一海うもよ和ゆうばわうばるほ者とうる

鄙一らば

よるんびくーらず

ゆうゆ[illegible]月ゆ[illegible]朝[illegible]の北[illegible]ゆきをうべうあべうあと

この方[illegible]月人[illegible]はは[illegible]

うよはうくうたくすきを毎人何ら[illegible]

毎ゆうたるんくりどゆ[illegible]いうり言るゆよ

くもゆうもいたでよるんくゆうくーけ毎

ひらくへうあつるほ時よ毎ゆうたれきくー

[illegible]

[illegible]

[illegible]

致真云々は
あつま湯泉
のことにて前の詞
とる中略し

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源のうしが行くへゆくえをたずねてとまりける時に
山ざとにあてはるまつ時ゆとこゝろ留て所にてよめる

きつらめ

いろいろのよかるべき花ども何ゝ別の所にまつ
所をばきらひ給ひ給ひてをりをりに
人くまもなくうゑたりてをれば
留よりめる

源さゝ

人所のたるべくよりはるかにいとをもしろくおもへん
とこゝまよりうゑ給へるがいとをもしろくて
よみ給ふ

藤原のてきこ

そこまでくきけん人もあはれなりけるこゝまをたづねこゝまをたづねけよりはるかに

ちりぬるをこゝまをゆくえをしらぬ人にたづねてはしけるよりはるかに

藤原のてきこ

ちりぬるをこゝまをゆくえをしらぬ人にたづねてはしけるよりはるかに

藤原のてきこ

ちりぬるをこゝまをゆくえをしらぬ人にたづねてはしけるよりはるかに

はるかにこゝまをゆくえをしらぬ人にたづねてはしけるよりはるかに

ちりぬるをこゝまをゆくえをしらぬ人にたづねてはしけるよりはるかに

ちりぬるをこゝまをゆくえをしらぬ人にたづねてはしけるよりはるかに

藤原のてきこ

はるばるよりあつまりて
つくまとぶ花桜よりもせんとうんこうしたまくく
うるうんのみこれ舎利舎より山あのびるて
ゆりあつまりよりはれ花のうちあてよりる

僧正遍昭

山風よ桜はまれにそなきるへ花はまさるとまるべく

僧正法師

ぶつあつまる君とまるべくにやいかんとうたれ花さきはやふる
仁和のみかどうえんこよおいてもうるはよりる
のたきはらんじよおくりあつまりたまい
るるよよりる

遍照法師

あるべくしてうるあつまるるこそ花はうるへとまるやうとをいかん

如人なるものはたびよりあつまりあつまる
どたうべくあめのてうつりあれどしのつきも
まて伯とさはるまでいで伯をはりよりうの月
とをうるくく

行平朝臣

秋くれの花とび雨よりあつまりもどをまたはりて秋をうとも
くよりあつまりあつまる

遍照

如人の心伯をうるはよりの秋のまでれまもどつりはる
如つれおやきくるよりはるべくはかるうるく
つくまあつまりはて

みはの孫

初瀬にて桜くをはるはるこそこのはるまあひとめまこれよりはの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

霧藤 哥

[illegible]月はなくとみまがふ

安信仲麿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いづくの山さとを高くまでくるそたまそよ
なし

山ゝ所ゝの霞ゝうらゝかにいづまさやさくひるのたん
こしの國へゝかまくらの山みくらゝ

みたれ

きさらゝ月の雨はしらけまさぐあらじ明るゝ雪ほぐ
いづくまへゝかまくらの山みたるあそよる

つゝゆき

いとゝあるゝ西ゝ雪くよ別られんでくをもかゆゆる
かひのくゝふへまくらの雪時みちにくよる

見たる

ゝ夜さむ雪ゝつ春ゝくゝひつ草の枕ゆまくゝびめ

たづまのくゝ光ゆへゝ山ゝ雪ゝ雪ゝ雪

みこし殿をせゝらんぼうせゝえせばうり
まうでゝとよゆくよう国

きゝあるとゝ

ひゝせる二度きまんに来ますそ嵐ゝ時人をあらぶる雲
業平朝臣のうゝよおゝ海ゝ海はよあしけ
山ゝそよう国

ゝゝびゝゝみゝゝ二度ゝ嵐ゝ時人をあらぶる雲

そゝぐゝゝの朝臣

白ほゝゝゝの独とうゝべきゝ紀貫之ゆゝる弥やうゝ

素性法師

物名

うぐひす　藤原ときはる朝臣

ふるえだにうぐひすなくなり　ときはるつらゆきとものり

ほくべきはるにこそあめれ　在原ときはる

うゐのうちせしかいもとぐるあるゆゑにかつ神よりうるはしん　や

涙　　土佐忠岑

たちとまりくるるはるをしぬはるまあやこまのうれしうつを

うめ　　くるんしんしば

ゆきうめとはるをりてくるみぬはるをうぐいすの白ひて

かすはなれ

ひをとゝ涙のうちにいとゞくるまで風ぐるまうはるはひむ

ちくさのはな

とてうぐひすとりのいとゞめそ思つゝ

かくやとも　ぬるやゝ

わかくさもはるはいかゝ事ぬるまんまこうへば

ゆくもはるはいかゝ　をしみつけるを

長雨のふるとはるをもものやゝはるあせかくれ

なくたまのまゝ　ゝゝもうし

みくまの石野の滝のうつ玉ぬきもこうるん

風まのはるまゝ　くるんしんしば

始をきのはやはるきはるどもあるのくるはんはるしき

あつひ
くぐ[illegible]ひのまれなる人はつぐ[illegible]思ひ
人ゆへ[illegible]ひめ[illegible]ひ[illegible]きは[illegible]思ひ
くたも　　伝西遍　船

散のこのちいわ[illegible]ようなる[illegible]花思ひ[illegible]ゆ[illegible]海
ちうび　　はつ[illegible]き

我[illegible]ひ[illegible]ひ[illegible]ぞ[illegible]る[illegible]の色はわ[illegible]ぬ[illegible]ら[illegible]べ
をこ[illegible]　　こと[illegible]

白[illegible]はよ[illegible]や[illegible]ぐ[illegible]の花はと[illegible]ゆ[illegible]
朋[illegible]ぬ[illegible]ぐ[illegible]ら[illegible]ぐ[illegible]花[illegible]今[illegible]の[illegible]ぬ[illegible]
朱[illegible]ぬ[illegible]を[illegible]ゆ[illegible]色の[illegible]と[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]ら[illegible]ぬ[illegible]

[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]の[illegible]人[illegible]ぬ[illegible]
きら[illegible]の花　　ことの梁

ゆ[illegible]ら[illegible]の[illegible]成[illegible]ら白[illegible]草[illegible]色[illegible]ゆ
ら成も　　しら人[illegible]ば

[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]の花[illegible]ら[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]の花　　[illegible]ぬ[illegible]

[illegible]の花[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
たくれ　　[illegible]人[illegible]ぬ[illegible]

[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]蟬[illegible]ぬ[illegible]
ふご　　[illegible]人[illegible]名実

[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]

二條后きさきの宮やまとむかしの時にも
どよみうたよみさせたまひしとき
みな屋やたひく
花のまよりはるかすみこもれるこのこかるはぎ
ちりぬべしとよみうたよみたまひしとき
おのゝ
山たちかくしてのこりたるあしたの花ぞ散なる
平あつゆに
郭公なくこゑのもとにやまぶきはかはらぬ色をたもちけり
ちりぬべしとよみたまひしとき
うゑ
鶯はうつゝにぞなくなるこゑのかはらぬ
うつなぐさ
ぬぎ
うぐひすの声にけりなすぐさまんうつゝをはわれ
ぬ

たゝむこれとゝ宮
はるごけ
花の色はうつりにけりいたづらにわが身よにふるながめせしまに
ふごうけ
ふるとて春はものもはなつびらはるのべ人出
こけとゝ宮
春ゝて春はものもはなつびらはるのべ人出
かはうけ
ひとりのはかきゝ
はるゝけくあるべうけゆく人ゝの月ゆく人ゝを秋の山ゝぜ
まうび
まうび
たゝ
たゝ
はるゝけくあるべうけゆく人ゝの月ゆく人ゝを秋の山ゝぜ
ぎ
ぎ

いろいろきすがたにかつめをうたひてるまつ成ばをそなへ
かつらゝゝふまてまのうちうるはらうる

安信清行紀貫

涙のおとにはさそふあきこゝあるいまのうたびやかつらん
いづゝさき
かつ〇これもかつきこゝ

かりはかつ〇宿海のうたびうたびいづゝさきうるあたゝこゝ
うゝさに
わかの浦〇月

かつらよりつゝさきまてうるをんなをみらん法をかこうらう
伊勢

涙の花はなかつゝたてうらうらうらうらうらうらうらん
かつらやうに
けうらはき

うゝゝ宿のはつゝ春うゝやかるゝんゝゝ月のよのはつゝ
よゝゝゝ
長月のつゝべかゝまゝゝ白雪
かつゝ乃

夜雪はうゝいまゝゝ宿のゝ春のゝ
ゝ月のゝゝゝ
秋ゝ月はつゝのゝゝゝ
百和歌
花ゝゝふゝゝゝゝ風
すゝゝ
まゝゝすゝゝ
をき火

ゆきまがるくるごよろこうえの源川をきひんけやうこゝにいん

ちまきき　大江為忠

ちらまきの笹まくやつるるゆかぐ行ぐよろうぬるあめとぞうく

そなたをこそ思へうづめ何うけくは乃

うこよめとゝへのいひうふぐよろ俗

俗名　重宣

これのうちのよろ乃くやゝてうけゆけぐんづなよちるを

ねづゝかう

中村俊定文庫

東京帝國大學圖書